クレルヴォー修道院の祭壇と聖遺物

Les autels et les reliques de l'abbaye de Clairvaux

北　舘　佳　史

要　　旨

本稿はシトー会クレルヴォー修道院の祭壇と聖遺物に注目して聖なる空間の構成と共同体に期待された聖遺物の働きを明らかにすることを目的とする。そのために14世紀に作成された『祭壇書・埋葬書』と15世紀から17世紀の祭壇の聖別文書を主要な史料として検討する。第三聖堂は聖ベルナールと聖マラキの墓を中心に構成され，普遍的な聖人や地域的な聖人の聖遺物が入念に配置された。聖遺物にはキリスト教世界の歴史と地理におけるクレルヴォーの位置を示し，兄弟たちに規範を与え，共同体の永続性を保証する役割が与えられた。13世紀以降は司牧的配慮から30㎞圏内の周辺施設に祭壇が設置され，ベルナールの聖遺物が拡散し，聖なる極のネットワークが形成され，修道院と周辺空間の関係が調整された。また，ベルナールの聖遺物は系列修道院やその他のシトー会修道院の祭壇にも配され，クレルヴォーとの関係を補強するような働きをした。これらは中世後期のシトー会で高まる聖人崇敬が果たした多様な働きの１つとして注目される。

キーワード

シトー会，聖遺物，聖人崇敬，祭壇，聖ベルナール

はじめに

修道院の空間組織というテーマが近年多くの研究者の関心を集めている。例えば，修道院は社会空間の構成の実験室であり，外部の社会にもモデルとして影響を与える前衛であったとロウェルスは述べ，カロリング時代か

ら11・12世紀頃までの修道院の空間的な表象や物理的形態の変化のアウトラインを描いた。それによれば，はじめは祭壇を中心とし，徐々に聖堂や墓地，さらには修道院の全体や円形の周辺空間が神聖な空間とされ，聖なる場から聖なる領域への転換が起こったと言う[1)]。一方，12世紀の改革修道制を代表するシトー会の空間組織については，内部の装飾を排した厳しく簡素な修道院空間，そして農村のグランギアと呼ばれる凝集的な所領群の直接経営と都市の経済拠点を通じた市場との連携が特徴とされ，これまでに多くの研究が積み重ねられてきた。「シトー空間」と題されるコロックが1993年には開催され[2)]，修道院とグランギアと都市に設置されたドムスのネットワークからなる空間組織について論じられた。しかし，聖なる場を核とする空間形成という観点からシトー会修道院を捉え直すような試みは十分になされていない。本稿では祭壇に注目してクレルヴォー修道院の聖なる空間の構成の特徴を考察したい。

シトー会は従来の修道制の世俗との関係のあり方を見直し，修道生活の混乱への恐れから聖人崇敬や巡礼に警戒的であったことで知られる。13世紀になると態度を変化させ，修道会として列聖の運動を積極的に推進し，巡礼地になる修道院も登場し始め，中世後期には世俗の宗教性とも呼応する形で修道会の聖人崇敬は高まりを見せる。ベルナールを別にするとシトー会の聖人崇敬というテーマは従来あまり関心を集めてこなかったが，最近は共同体のアイデンティティの形成や世俗との関わりという観点から英語圏を中心に研究が進められている[3)]。筆者も巡礼地となったレ・シャトリエやポンティニーについて論じたことがある[4)]。祭壇と聖遺物という論点に関しては，シトー修道院など個別的な研究はなされているが[5)]，必ずしも活発に議論されているわけではない。本稿ではクレルヴォー修道院の聖遺物崇敬から窺える共同体のあり方についても注目したい。

クレルヴォーは1115年に初代院長の聖ベルナールが創建し，シトーを霞

ませるほどの勢力を持つ12世紀の改革の中心的な存在になった影響力のある修道院である。教皇エウゲニウス３世の他に多くの枢機卿や司教を輩出し，全ヨーロッパに350以上の系列の修道院を広めた。革命により破壊され，刑務所として使用されたために聖堂も祭壇も墓も破壊されたが，多くの文献史料が残されている。祭壇と聖遺物に関しては，14世紀に作成された『祭壇書・埋葬書（Liber altarium et Liber sepulchrorum）』と近世の聖別の文書と訪問記録が主要な情報源である[6)]。本稿では『祭壇書』を主に検討するが，2002年に刊行されたこの史料はほとんど使われていない。

1990年代にキンダーがクレルヴォーの第三聖堂に関する文献や図像の史料が豊富にあることに注意を促してから聖堂の研究が進み[7)]，建築史研究者の間で議論が活発に行われるようになった。聖堂内の祭壇と墓については，ガジェウスキが聖マラキ崇敬と高位聖職者の墓に注目して教会改革の理念を論じ，サンタマリアが新たに刊行された祭壇書に基づいて後陣の建設の目的について論じた[8)]。聖遺物に関しては19世紀末から宝物庫の目録が刊行されたが，1875年のラロールの研究が現在でも有益である[9)]。長らく研究がなかったが，最近ではレスターが目録に基づいて宝物庫の主要な聖遺物と聖遺物容器を紹介し，ボダンが革命後の聖遺物が辿った命運について論じた[10)]。

こうした研究を踏まえて，本稿では聖遺物と祭壇に注目することでクレルヴォーの空間の編成の仕方を検討し，聖遺物の記憶を共有する修道院共同体のアイデンティティについて考察する。第１章では史料の性格とクレルヴォーの聖遺物のコレクションについて論じ，第２章では聖堂内の祭壇の設置の過程と聖遺物の性格について分析し，第３章では聖堂外の祭壇の聖別と聖遺物の拡散の現象について検討する。こうした作業を通じてクレルヴォー修道院の聖なる空間の特徴とその変遷を明らかにしたい。

1　クレルヴォー修道院の聖なる財産と史料

クレルヴォー修道院の聖具室では14世紀頃から修道院の聖遺物や宝物に関する多くの史料が作成された。本稿で主に扱う『祭壇書』は各祭壇を聖別した人物と日付と祭壇に納められた聖遺物の記録を集成したものであり，『埋葬書』は墓の位置と埋葬された人物の簡単な事績や墓碑銘を集めたものである。両者は区切りなく連続的に書かれており，祭壇は聖人の墓とみなされているために内容的にも両者は関連している。ラロールは1875年に古文書館に残る数点の聖別の文書を刊行したが，この時点で祭壇と聖別に関する文書の大部分が散逸していた[11)]。一方，レ・デューヌ写本に収められた『埋葬書』は17世紀にエンリケにより刊行された。このテクストはミーニュとラロールにより再刊されたが，その間に写本は散逸した[12)]。クレルヴォーに手稿は２点存在したが，そのうちオリジナルは散逸し，もう１つの写本は革命で行方不明になった。1994年にサザビーのオークションに出品されたこの写本をダブリンのトリニティ・カレッジの図書館が購入し，コーカーがクレルヴォーの写本であることを特定した。こうして現在はMS 10708の分類番号で同図書館が所蔵している[13)]。

コーカーによれば，30代目のクレルヴォー院長ジャン・デザンヴィルの死後，1340年頃にオリジナルの手稿が作成され，1500年頃にこのダブリン写本が筆写されたと考えられる[14)]。さらに，この写本に16・17世紀に多くの文書が追加され，現在に伝わっている。写本は226×133mmの大きさで羊皮紙47葉から成り，近世の手で頁数が書かれている。複数の手により筆写されており，元の部分はゴシック体で，追加部分はバスタルダ体で書かれ，ほとんどの文書には赤字の見出しがつけられている[15)]。

写本の構成に関しては，１頁から20頁が『祭壇書』，20頁から40頁が『埋葬書』，40頁から45頁がクレルヴォー修道院長のリスト，47頁から51頁がシ

トー修道院長のリスト，51頁から53頁がクレルヴォー院長フィリップの墓とジョワンヴィルのジョフロワとギヨームの墓に関する文書，最後に，53頁から88頁が16・17世紀に追加された礼拝堂と祭壇の文書群である。本稿ではこのうち『祭壇書』と16・17世紀に追加された部分を主に検討の対象にする。前者はコーカーの校訂版があるが，後者は未刊行である。

冒頭部分で『祭壇書』は聖具室に保管されている記録から抜粋したものであることが明記されている[16)]。聖具室は祭壇と墓地を管理しており，独自のアーカイヴを持っていた。『祭壇書・埋葬書』はその管理のための道具として編纂されたものと考えられる。『祭壇書』は祭壇の聖別に関する定式的な文書の集成であり，全体の構成を意識して作成されている。全体で35のセクションから成り，聖堂の東側の祭壇，南側の祭壇，北側の祭壇，主祭壇，左側の祭壇，主祭壇周辺の祭壇，付属礼拝堂の祭壇の順に聖別の文書が配列されている。このように空間的に構成する一方，時間的にも1157年から1336年まで概ね年代順に文書が配置されるように配慮している。

16・17世紀に追加された部分は57の文書から成る。大部分が祭壇の聖別の定式的な文書であるが，インノケンティウス８世とレオ10世の勅書やバル・シュル・オーブの祭壇に関する枢機卿や司教の書簡も含まれている。ここで聖別の対象になっているのは，まず，クレルヴォーの敷地内にある祭壇である。『祭壇書』にも登場する聖堂内のいくつかの祭壇に加え，聖堂外にあるフランドル伯の礼拝堂や門の礼拝堂などの祭壇と聖遺物の情報が得られる。次に，クレルヴォーのグランギアやケラリウムやドムスの祭壇の文書が含まれている。グランギアはシトー会修道院の所領経営の単位であり，その拠点となる施設を指す。一方，ぶどう栽培に特化した経営地とその施設がケラリウムと呼ばれる。ドムスは都市に設置された拠点となる施設である。こうした施設にも13世紀以降には祭壇が設置された。最後に，他のシトー会修道院の祭壇も聖別の対象になっており，クレルヴォーの娘

修道院や系列修道院や関係の深い修道院の祭壇の文書が含まれている。

宝物庫のコレクションの研究者のコルデスによれば[17]，聖遺物を祭壇に納める習慣は４世紀に遡るが，６世紀には１つの祭壇に複数の聖遺物を納め始め，聖遺物のリストが必要になった。10世紀半ば以降，司教は祭壇の聖別の際に納める聖遺物の名前を口頭で告げることを求められ，11世紀以降は聖別の日付と聖別を行った人と聖遺物の名前を記録した文書を祭壇に納めることが求められた。この聖別の文書は祭壇に入れられ，封を解かれて開けられる日まで聖遺物の記憶を保つ役割を果たす。祭壇が開けられると，新たに聖別の必要があり，古い文書を基に新しい聖別の文書が作成される。クレルヴォーの聖別文書においても以前の祭壇に入っていた文書への言及がしばしば見られる。

こうした史料に記されているのは修道院が所有する聖遺物のすべてではないことにも注意が必要である。革命でほとんどが失われたが，クレルヴォーは司教座教会に匹敵する規模の聖遺物・宝物コレクションを所有していた。宝物庫の構成は1405-10年，1504年，1660年，1710年，1741年に院長の命令で作成された５つの目録から知ることができる。修道院は革命の前に約1,000点の聖遺物容器や金銀細工品や典礼用具を所有していた。1743年に修道院の図書係で聖具係のクロード・ギトンがこのうち26の最も貴重な聖遺物容器をパリの金銀細工商に鑑定させたところ，その市場価値は10,704リーヴルと評価された。聖具室は小宝物庫と呼ばれ，主として典礼に関わる物を所蔵した。一方，上の階の大宝物庫には７つの大きな収納棚に聖遺物容器や典礼具が保管されていた[18]。

宝物庫には，まず，クレルヴォーの初代院長の聖ベルナールとアイルランド出身の司教の聖マラキに関連した聖遺物が保管されていた。ベルナールに関しては，カリスやカズラやストラや帯や印章など，また，マラキに関しても，カリスやカズラやダルマティカやミトラやサンダルなど使って

いた道具や祭服を収蔵した。また，30代目の院長ジャン・デザンヴィルは14世紀前半に多くの聖遺物容器の製作を命じたが，ベルナールの頭蓋骨と指，マラキの頭蓋骨と腕がそれぞれ宝石で飾られた豪華な聖遺物容器に納められて保管された[19]。

次に，クレルヴォーのコレクションにおいては十字軍や聖地に関連した聖遺物が重要な位置を占めている。代表的なものを挙げると，ラテン語でタブラ（tabula）と呼ばれるビザンツ式の聖遺物箱が12個あった。聖遺物箱の中央には聖十字架の破片が，その周囲に数多くの聖遺物の断片が納められている。12世紀末から聖地やギリシャから多くの聖遺物がクレルヴォーに贈られた。例えば，1168年にエルサレム王アモリ１世が聖十字架の破片をクレルヴォーに贈った。12世紀末には十字軍に出征するフランドル伯フィリップ・ダルザスが移動祭壇や聖遺物や聖遺物箱を修道院に寄贈し，寡婦のマティルダは聖十字架の破片と聖母の髪を提供した。フランドル伯ボードワン９世が初代ラテン皇帝となると，彼と息子のアンリ１世が数多くの聖遺物を修道院に贈った。例えば，第４回十字軍の後にラテン皇帝アンリ１世は大型の金の十字架を修道院に贈り，さらに聖十字架や聖槍の断片や荊冠や聖ゲオルギウスと聖ミナスの聖遺物を納めた聖遺物容器も寄贈した[20]。

さらに，13・14世紀には修道士や司教・教皇特使などが聖遺物やその他のものを新たにクレルヴォーに寄贈した。一方，この時代にはビザンツの聖遺物を保存し，展示するために多くの聖遺物容器が製作された。タブラ型の聖遺物箱が多数製作された他，聖バルナバの頭蓋骨を納めるピラミッド型の聖遺物容器や聖マルコの頭蓋骨の断片や使徒聖トマスの腕などを納める塔型の聖遺物容器も作られた[21]。

こうして蓄積された修道院の聖なる財産は宝物庫に保管されるだけでなく，聖堂内や聖堂外の祭壇に配置され，クレルヴォーの聖なる空間が組織

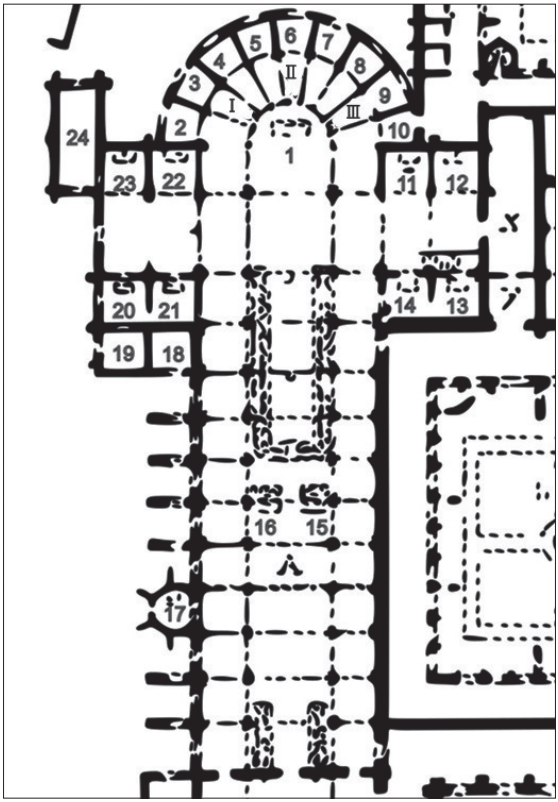
されたのである。

2　聖堂内の祭壇と聖遺物

『祭壇書』からはクレルヴォーの聖堂内の祭壇が徐々に増加し，祭壇ごとに聖遺物が注意深く配置され，聖堂の全体が聖なる空間として組織されたことがわかる。ここでは聖堂内の祭壇の形成の過程を辿り，聖遺物の構成とその意味について考察する。

『祭壇書』は聖堂内の29の祭壇と聖具室の祭壇と３つの付属礼拝堂の祭壇についての情報を提供する。祭壇の聖別の時期は1157年から1336年までにわたっている。クレルヴォー第三聖堂の建設の開始の時期をめぐっては聖ベルナールの死（1153年）の以後か以前かで建築史家の間で論争があったが，コーカーによるダブリン写本の発見で明確になった。冒頭で「主の受肉より1157年，私たちの尊敬すべき父であるベルナールの死から４年後，聖堂の建設の開始から５年後に，この聖堂の東側の主祭壇に近くにある８つの祭壇が聖別された」と書かれているように[22]，ベルナールの死の前年の1152年に建設が開始された。それから５年間で作業が進行し，1157年から1161年の間にアプシスとトランセプトに設置された祭壇が続々と聖別された。

『祭壇書』では上述の文に続き，聖堂の東側の祭壇の聖別について一括して説明される（図１と表１を参照）。1157年にルンド大司教エスキルが５つの祭壇（救い主の祭壇，洗礼者聖ヨハネの祭壇，福音書記者聖ヨハネの祭壇，使徒聖フィリポの祭壇，聖アンデレの祭壇），ローザンヌ司教アメデが２つの祭壇（使徒聖ペテロの祭壇，殉教者聖ラウレンティウスの祭壇），そして，オセール司教アランが１つの祭壇（殉教者聖ステファノの祭壇）を聖別した。さらに，1158年にはラングル司教ジョフロワが殉教者聖デシデリウスの祭壇を聖別している[23]。



（出所）https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Plan.abbaye.Clairvaux.2.pngを筆者が修正

図１　クレルヴォー第三聖堂

表１　聖堂と付属礼拝堂内の祭壇の聖別

番号	聖別年	月日	祭壇名	聖別者	図１
1	1157	6 /23	救い主	ルンド大司教エスキル	6
2	1157	6 /24	洗礼者聖ヨハネ	ルンド大司教エスキル	5
3	1157	6 /25	聖ヨハネ・聖マタイ・聖マルコ・聖ルカ	ルンド大司教エスキル	10
4	1157	6 /26	聖フィリポ・聖ヤコブ・聖マタイ・聖バルナバ	ルンド大司教エスキル	9
5	1157	6 /27	聖アンデレ・聖タダイ・聖トマス・聖シモン	ルンド大司教エスキル	8

6	1157	6 /29	聖ペテロ・聖パウロ・聖ヤコブ・聖バルトロマイ	ローザンヌ司教アメデ	7
7	1157	6 /30	聖ラウレンティウス・聖ヴィセンテ・教皇聖クレメンス	ローザンヌ司教アメデ	3
8	1157	7 /14	聖ステファノ・聖ファビアヌス・聖セバスティアヌス・聖イグナティオス	オセール司教アラン	4
9	1158	12/26	聖デシデリウス・聖マメス・聖マウリティウス・聖ディオニシウス・聖エイレナイオス	ラングル司教ジョフロワ	2
10	1157	9 / 6	聖アグネス・聖セシリア・聖ペトロニラ・聖スコラスティカ	ナント司教ベルナール	
11	1157	9 /21	聖ベネディクトゥス・聖レミギウス・聖アエギディウス・聖コロンバヌス	ランス大司教サンソン	13
12	1157	11/24	全天使・全聖人	オセール司教アラン	
13	1158	2 / 5	聖アガタ・聖ルチア・聖アナスタシア・聖プリスカ	トロワ司教アンリ	
14	1158	3 /12	聖グレゴリウス・聖ヒエロニムス・聖アンブロシウス・聖アウグスティヌス・聖ヒラリウス	クール司教アダルゴット	20
15	1158	4 /16	マグダラの聖マリア・聖マルガリタ・エジプトの聖マリア・聖フェリキタス	ラングル司教ジョフロワ	21
16	1158		全聖人	ボーヴェ司教アンリ	22
17	1158	5 / 6	聖マルティヌス・聖ニコラウス・聖ゲルマヌス・教皇聖シルウェステル	ミティリーニ司教ヨハネ	23
18	1161	8 /21	幼児殉教者	パヴィア司教ピエトロ	
19	1174	10/15	主祭壇（聖母マリア）	教皇アレクサンデル 3 世	1
20	1174	10/15	聖三位一体	ルンド大司教エスキル	15
21	1192	5 / 1	聖ディオニシウス	ソラ司教マウリツィオ	18
22			カンタベリ大司教聖トマス・リモージュ司教聖マルシャル		
23			聖マロ・聖エドムンドゥス・聖ヨハネ・クリソストモス		
24	124? 6	4 / 1	聖アントニオス・テーベの聖パウロス・聖アエギディウス・聖レオナルドゥス・聖フィアクル	ラングル司教ユーグ	
25			聖ニコラウス		
26	1224	11/ 7	聖十字架	司教マリアン	16
27			聖ベルナール	クレルモン司教ポンス	II
28			聖エウトロピウス・聖ゾシマ・聖ボノサ		III
29			聖マラキ		I
30	1276	7 /14	聖具室（聖ゲオルギオス・聖マウリティウス・聖アルセニオス）	クレルモン司教ジャン	12
31	1255	9 /26	ラレーの礼拝堂（聖母マリア・聖ペトロ）	ラングル司教ギ	24
32	1312	8 /21	ギヨーム・ドゥ・シャトレの礼拝堂（聖エリギウス）	オーヌ司教ギ	19
33	1336	12/24	エザンヴィルの礼拝堂（聖母マリア・聖マラキ・聖ベルナール）	カンブレ司教ユーグ	17

（注）右端の数字は図 1 の祭壇の位置を示す。

これに続いて聖堂の南側の祭壇の聖別についてまとめて記される。それによると，1157年にナント司教ベルナールが聖アグネスの祭壇を，ランス大司教サンソンが聖ベネディクトゥスの祭壇を，オセール司教アランが全天使と全聖人の祭壇を聖別した。そして，1158年にはトロワ司教アンリが聖アガタの祭壇を聖別したとされる。これに続く3番目から15番目までの文書に上述した祭壇それぞれに納められた聖遺物が詳細に記録されている。

これに続く文書で聖堂の北側の4つの祭壇の聖別についてまとめて説明される。1158年にクール司教アダルゴットが聖グレゴリウスの祭壇を，ラングル司教ジョフロワがマグダラの聖マリアの祭壇を，ボーヴェ司教アンリが全聖人の祭壇を，ミティリーニ司教ヨハネが聖マルティヌスの祭壇を聖別した。そして，17番目から20番目の文書で祭壇ごとに納められた聖遺物が記録される。最後に，身廊に設置された幼児殉教者の祭壇を1161年にパヴィア司教ピエトロが聖別したことを記す文書が配置されている。

このように4年間に18の祭壇が続々と聖別されたが，クレルヴォー第三聖堂の建設には修道士数の急増と典礼の必要性の増大に応えるために多くの祭壇を設置する目的があった[24]。同様の理由からシトー，ポンティニー，モリモンといった他の主要なシトー会修道院でも聖堂の東端部分の改築が12世紀後半に行われた。ここで聖別を行った人のうちルンド大司教エスキル，ローザンヌ司教アメデ，オセール司教アラン，ラングル司教ジョフロワ，ナント司教ベルナール，クール司教アダルゴット，ボーヴェ司教アンリ，ミティリーニ大司教ヨハネはクレルヴォーの元修道士や後の修道士であることが確認できる[25]。また，トロワ司教アンリとパヴィア司教ピエトロはともにシトー会士であり，ランス大司教サンソンはベルナールとの関係が近く，シトー会に好意的で便宜を図った人物として知られる。このように管区司教のラングル司教だけに頼るのではなく，生前のベルナールやクレルヴォーと関係が深い多くの改革派司教たちを通じて祭壇の聖別は推

し進められた。改革派の聖職者グループと修道院とのネットワークの重要性は埋葬や記念祈祷においても見て取れる[26)]。

1153年８月20日にベルナールが死去した２日後に聖堂の聖母マリアの主祭壇前に埋葬された。シトー会では院長は集会室に埋葬されるのが慣例であった[27)]。そのため聖堂に埋葬されたことは生前より聖人とみなされていたことを示している。1157年から61年の間に祭壇が聖別された後，1163年にベルナールの１回目の列聖申請がなされたが，この時は失敗に終わった。1174年にアレクサンデル３世に２回目の申請を行い，ようやく列聖が成功する。こうして同年に教皇アレクサンデル３世がクレルヴォーで主祭壇を聖別し[28)]，ベルナールの遺体が掘り出され，移動された。主祭壇の裏側に聖人の墓が準備され，４年後の1178年に遺体が移葬され，聖堂の改築作業が完了した。なお，1250年にはベルナールの母の聖アレトの遺体がサン・ベニーニュ・ド・ディジョン修道院から奉遷され，救い主の祭壇の前，すなわちベルナールの墓の隣に埋葬されている。『祭壇書』にはこのベルナールの墓に付属する祭壇の聖別に関する文書がある。28番目の文書によれば，主祭壇の周囲に３つの祭壇があり，左側に聖マラキの祭壇，右側に聖エウトロピウス・聖ゾシマ・聖ボノサの祭壇，そして真中に聖ベルナールの祭壇が存在した（図１のⅠ・Ⅱ・Ⅲ）。次の文書では元クレルヴォー院長のクレルモン司教ポンスが聖ベルナールの祭壇を聖別したことが記され，祭壇に納められた聖遺物が列挙される[29)]。

アイルランドの教会改革の推進者として知られたアーマー大司教のマラキは，教皇特使に任命され，ベルナールと親交を深めた。1148年に旅の途中にクレルヴォーで死去すると，聖堂内の聖母マリアの礼拝堂に埋葬された。1190年に正式に列聖されることになるが，クレルヴォーでは死の直後から聖人として崇敬された。1174年にベルナールとともに遺体が礼拝堂に移され，列聖の翌年に主祭壇近くの墓に正式に移葬された。上述したベル

ナールの祭壇の聖別に関する文書にマラキの祭壇について書かれているが，祭壇の文書が見つからないことを理由に納められた聖遺物の情報は記されていない[30]。また，『埋葬書』には聖マラキの墓碑銘が収録されているが，そこではアイルランドの宣教と改革の事業が称えられ，クレルヴォーでの死去と葬儀の様子が書かれている[31]。当初のプランはともあれ，ガジェウスキが主張するように，最終的に修道士と司教の模範のベルナールとマラキの２つの墓を中心に多数の高位聖職者の墓を配置するように聖堂内の空間は組織され，クレルヴォーを改革修道制の中心として提示することになった。

最後に，主祭壇の右側の墓の祭壇の聖遺物は1226年頃に元クレルヴォー院長でポルト・エ・サンタルフィナの司教枢機卿コンラートによってイタリアのポルトから送られたものである。３世紀のローマの殉教者の聖エウトロピウスとその姉妹のゾシマとボノサ，そして名前の不明なもう一人の聖遺物が送られ，そこに他の聖遺物が追加されたが，この祭壇の文書も見つけられなかったと書かれている[32]。聖務日課や行列において，聖母マリアへの祈りの後に，聖ベルナールと聖マラキと聖エウトロピウスら殉教聖人への祈りが行われたように，この聖堂の主祭壇の周辺の墓の聖人たちは典礼において中心的な位置を占めていた[33]。

13世紀以降に顕著なのは付属礼拝堂の祭壇の聖別の事例である。31番目の文書で３つの付属礼拝堂の聖別について語られ，32番目から35番目の文書で聖遺物について記されている[34]。それによると，1255年にラングル司教ギがラレーの礼拝堂の祭壇を，1312年にはオーヌ司教ギがギヨーム・ドゥ・シャトレの礼拝堂の祭壇を，1336年にはカンブレ司教ユーグがエザンヴィルの礼拝堂の祭壇を聖別した。最初の２つはラレーの領主ルノー・ド・グランセーとシャンパーニュのバイイのギヨーム・ドゥ・シャトレという世俗の領主が設立したものであるが，３つ目は30代目のクレルヴォー院長

ジャン・デザンヴィルが建て，自身が埋葬された礼拝堂である。ジャンは上述したように豪華な聖遺物箱を製作したことでも知られ，中世後期の個人的な信心と崇敬のあり方を示している。

ここまで聖堂と付属礼拝堂内の祭壇の設立の展開を述べてきたが，次に，これらの祭壇に納められた聖遺物について検討する。33の祭壇のうち28の祭壇について聖遺物の情報がある一方，５つの祭壇の聖遺物については古い文書の散逸や判読の困難を理由に記されていない。例えば，アイルランドからの聖遺物については文の粗雑さのために文書が読めないと書かれている[35)]。聖遺物の数は祭壇ごとに異なっており，主祭壇が最多で150を数える。これに聖アントニオスの祭壇が82，全聖人の祭壇が53，聖デシデリウスの祭壇が52と続く。逆に数が少ない例としては救い主の祭壇と聖ヨハネの祭壇の11があり，最小は洗礼者聖ヨハネの祭壇の10である。聖堂の祭壇全体で平均37であり，ブラウンの研究で示された平均10をはるかに超える数の聖遺物が納められている[36)]。

祭壇の聖別の文書では単に聖人の聖遺物（relique）と言及するだけでどのような種類の聖遺物なのかを言及していない場合も多い。種類が特定される聖遺物の中では，骨（ossibus）への言及の事例が最も多い。頭や指や肋骨，他には血や歯や髪や髭など特定の身体部位に言及する事例も多く，全体に身体の聖遺物が重視されている。一方，接触型聖遺物の中では着用していた衣服や履物が多い。例えば，オセールの聖ゲルマヌスのヤギの毛の衣，聖マウリティウスの肌着の他，洗礼者聖ヨハネの袋の布，聖エリギウスを140年間包んだ絹の布などがある。

聖人の種類に関しては，先行研究が示すように[37)]，殉教者の割合が非常に高いことが指摘できる。殉教者の身体の聖遺物が多いことは，祭壇が聖人の栄光の墓という性格を持つことを強調している。殉教者としては使徒や聖ステファノや聖ラウレンティウスが重視されているが，テーベ軍団や

１万１千人の乙女のような殉教者集団に関する聖遺物が多くの祭壇に納められている。一方，証聖者の聖遺物の割合は低く，古い聖人が重視される伝統に従っている。新しい聖人としてはカンタベリ大司教の聖トマス・ベケットの血に染まった衣やシトー会の聖人たちの聖遺物が挙げられる。聖書に登場する人物やイエスの生涯に関わる聖遺物が豊富である点にもクレルヴォーの特徴がある。例えば，アブラハムとエレミヤの骨，聖ペトロの髭やイエスの靴，最後の晩餐のテーブル，聖母マリアがイエスの弟子と食事をした岩などである。聖十字架の断片や墓の断片などキリストの受難に関わる聖遺物も多く存在している。全体としては男性の聖人の聖遺物のほうが多いが，聖母マリアや女性聖人たちの聖遺物も重要な部分を成している。聖職者の聖人については高位聖職者に限定され，司教の聖遺物が最も多い。在俗の教会の祭壇と比べた場合，聖アントニオスや聖ベネディクトゥスや聖コロンバヌスなど修道制の発展に貢献した修道院長たちの聖遺物が比較的重視されているのも特徴的と言えるだろう。

祭壇が捧げられた聖人と納められた聖遺物との間には対応関係があり，例えば，洗礼者聖ヨハネの祭壇にはヨハネの骨が納められている。また，聖別の文書では祭壇の聖遺物は聖性や地位の序列に従って記載されている。例えば，全聖人の祭壇の文書では，キリスト，洗礼者聖ヨハネ，使徒，殉教者，証聖者，女性聖人の順に聖遺物が列挙される。主祭壇の文書では，キリスト，聖母マリア，洗礼者聖ヨハネ，族長，預言者，使徒，殉教者，証聖者，女性聖人の順であり，殉教者と証聖者のカテゴリーの中に教皇と司教のグループが区分されている。女性聖人に捧げられた祭壇の場合，例えば，聖アガタ・聖ルチア・聖アナスタシア・聖プリスカの祭壇の文書では，祭壇が捧げられた４人の女性聖人，使徒，男性殉教者，男性証聖者，女性殉教者の順である。このように天上の階層秩序が概ね反映するように祭壇の聖遺物も秩序づけられていると考えられる。

普遍的な聖人が優勢である一方，地域的な聖人の存在も『祭壇書』において確認することができる。クレルヴォーはラングル司教区に位置しているが，ラングル司教座の守護聖人である聖デシデリウスと聖マメスに捧げられた祭壇が東側の放射状祭室の一つに存在する。この他にも聖スペウシプス・聖エレウシプス・聖メラプシプス，聖フェリクス・アウゲベルトゥスといったラングルの聖人が含まれている。また，もう少し範囲を広げると，聖モンティエラメ，オセールの聖ゲルマヌスなどブルゴーニュ地方の聖人の聖遺物を確認することができる。こうした聖遺物は修道院の地域的なアイデンティティの在り処を表している。

最後に，聖ベルナール，聖マラキ，聖ピエール・ド・タランテーズなどシトー会の聖人が重要である。ベルナールはクレルヴォーにおける聖マラキ崇敬の基礎を築いた。ベルナール個人と聖遺物との関係を示す例として，マラキのテュニックと自分のものとを交換し，互いに相手の服を着用して埋葬されたが，生前は聖遺物のように扱ったというエピソードがある。また，1153年にエルサレムから送られた聖ユダ・タダイの聖遺物の入った小箱を自分と一緒に埋葬するように求めたことで知られる[38]。ベルナールは豪華な聖遺物容器や巡礼を厳しく批判したが，これは俗人信徒ではなく，霊的エリートである修道士に向けた批判であった。また，批判の対象は聖遺物の展示の仕方であり，聖遺物崇敬そのものではなかった。フィッツギボンによれば，クレルヴォーで組織された聖マラキ崇敬は俗人の巡礼者を対象としたものではなく，徳の鏡と模範を修道士に示すことが目的であり，奇跡は重視されず，聖遺物は深い観想の出発点として位置付けられたと言う[39]。このように聖遺物が修道士たちを鼓舞して聖性へと導く働きをする点が強調された。また，ベルナールがアイルランドの修道士に送った書簡において，マラキの死は「神のもとでの強力な保護者」を自分たちに与えたと述べられ[40]，聖遺物を通じて聖堂に現存する聖人はクレルヴォーない

しシトー会の執り成し手として捉えられている。シトー会の聖人たちが自分たちを執り成す特権的な存在であることは12世紀後半に作成されるエクセンプラ（例話集）においても強調されることになる。このように徳の鏡であり，執り成し手であるシトー会の聖人の聖遺物の崇敬はクレルヴォーの共同体の形成と維持において重要な役割を与えられていた。

注目すべき現象として，ベルナールの聖遺物が当初は主祭壇近くの聖人の墓にのみ置かれていたが，徐々に聖堂内に広まったことが指摘できる。聖ディオニシウスの祭壇（1192年聖別），聖アントニオスの祭壇（124?6年），ラレーの礼拝堂の祭壇（1255年），聖具室の祭壇（1276年），エザンヴィルの礼拝堂の祭壇（1336年）にベルナールの聖遺物が，また，後３者についてはマラキの聖遺物も一緒に納められていることが確認できる。このように12世紀末以降に聖人の崇敬の高まりとともに聖堂内に聖遺物が広く配置される傾向が顕著になるのである。

聖堂の祭壇の聖遺物はこのようにして普遍教会と地域教会の地理と歴史の中にクレルヴォーを位置づけている。後陣の放射状祭壇とベルナールおよびマラキの墓の物理的な配置も，こうした天上の階層秩序と２聖人およびクレルヴォーの共同体との関係を表していると解釈できるだろう。ベルナールの時代の記憶はクレルヴォーの共同体のアイデンティティの核をなしており，その聖遺物は起源を絶えず兄弟たちに想起させ，規範を提示し，共同体に一貫性と永続性を保証するような物として存在した。

3　聖堂外の祭壇と聖遺物

聖遺物は聖堂内に留まらず，敷地内，さらに修道院の外部にも存在していた。礼拝堂と祭壇の聖別に関する史料は，クレルヴォー修道院の聖遺物が広域的に配置されたことを示している。ここでは，13世紀以降にクレルヴォーの聖遺物が広く拡散した事実を明らかにするとともにその意味につ

表２　16・17世紀に追加された聖別の文書

番号	聖別年	月日	祭壇名	聖別者	
34	1166	9 / 4	聖ベルナールのドムスの近くの礼拝堂		
35	1285	11/ 6	モルヴァルの礼拝堂		○
36	1373	11/ 1	バル・シュル・オーブのドムス	ラングル司教ギヨーム	
37	1488	3 /11	フランドル伯の礼拝堂の主祭壇	クレルヴォー院長ピエール	
38	1488	8 /26	フランドル伯の礼拝堂（左側の祭壇）	クレルヴォー院長ピエール	○
39	1488	8 /26	フランドル伯の礼拝堂（右側の祭壇）	クレルヴォー院長ピエール	○
40	1488	3 /26	聖ニコラウス	クレルヴォー院長ピエール	○
41	1488	3 /10	聖具室	クレルヴォー院長ピエール	○
42	1494	4 /10	ロンゲ修道院	クレルヴォー院長ピエール	○
43	1494	5 /13	セルモワーズのグランギア	クレルヴォー院長ピエール	
44	1494	5 /14	管財係の館	クレルヴォー院長ピエール	
45	1495	6 / 1	フォンタルスのグランギア	クレルヴォー院長ピエール	○
46	1495	6 / 2	シャンピニーのドムスとグランギア	クレルヴォー院長ピエール	○
47	1495	6 / 3	シャンピニーのグランギア	クレルヴォー院長ピエール	○
48	1496	3 / 2	聖ヨハネ・聖マタイ・聖マルコ・聖ルカ	クレルヴォー院長ジャン	
49	1496	3 / 2	聖フィリポ・聖ヤコブ・聖マタイ・聖バルナバ	クレルヴォー院長ジャン	
50	1497	8 / 3	ウルスカン修道院	クレルヴォー院長ジャン	○
51	1498	6 /25	ギヨーム・ドゥ・シャトレの礼拝堂（聖アエギディウス）	クレルヴォー院長ジャン	
52	1497	12/ 6	フランドル伯の礼拝堂の下の祭壇	クレルヴォー院長ジャン	
53	1499	5 /26	ラ・ビエテ・デュー・レ・ラムリュ修道院	クレルヴォー院長ジャン	○
54	1499	6 /11	モントルイユ・レ・ダム修道院	クレルヴォー院長ジャン	
55	1499	6 /20	ラビエット修道院	クレルヴォー院長ジャン	
56	1499	6 /23	ロリーヴ修道院	クレルヴォー院長ジャン	○
57	1499	6 /27	ジャルディネ修道院	クレルヴォー院長ジャン	
58	1499	7 / 1	ヴィレール修道院	クレルヴォー院長ジャン	○
59	1499	8 /14	モノボスコの主祭壇	クレルヴォー院長ジャン	○
60	1500	6 / 2	モランの礼拝堂	クレルヴォー院長ジャン	○
61	1500	6 /11	フラヴィルのグランギア	クレルヴォー院長ジャン	
62	1500	6 /17	モール修道院	クレルヴォー院長ジャン	○
63	1500	6 /23	レニー修道院	クレルヴォー院長ジャン	○
64	1500	7 / 5	ノワールラック修道院	クレルヴォー院長ジャン	
65	1500	10/26	モランの礼拝堂の主祭壇	クレルヴォー院長ジャン	
66	1500	10/26	モランの礼拝堂（右側の祭壇）	クレルヴォー院長ジャン	
67	1501	7 /27	クレルヴォーの古い修道院	クレルヴォー院長ジャン	○
68	1502	9 /19	ファンのグランギア	クレルヴォー院長ジャン	○
69	1506	5 /16	ラ・ボルドのグランギア	クレルヴォー院長ジャン	○
70	1506	7 /12	コルネのグランギア	クレルヴォー院長ジャン	○
71	1506	7 /13	ブランフェのグランギア	クレルヴォー院長ジャン	○
72	1507	7 /26	クレルヴォーの門の礼拝堂	クレルヴォー院長ジャン	○

73	1507	8 /31	ウトル・オーブのグランギア	クレルヴォー院長ジャン	○
74	1508	9 /23	フォントネー修道院のドムス	クレルヴォー院長ジャン	
75	1509	7 /15	ヴァル・デ・ヴィーニュ修道院	クレルヴォー院長エドモン	○
76	1509	7 /15	ヴァル・デ・ヴィーニュ修道院の聖ベルナールの祭壇	クレルヴォー院長エドモン	○
77	1513	8 / 9	クレルヴォーの小回廊	クレルヴォー院長エドモン	○
78	1509	2 /24	ノートルダム・デ・プレ修道院	クレルヴォー院長エドモン	○
79	1527	2 /25	クレルヴォーのドムスのベルヴュ礼拝堂	クレルヴォー院長エドモン	○
80	1530	7 /10	コロンベのグランギア	クレルヴォー院長エドモン	○
81	1524	5 / 2	ロンゲ修道院のグランギア	クレルヴォー院長エドモン	○
82	1543	7 /19	クレルヴォーの門の教会の祭壇	クレルヴォー院長エドモン	
83	1549	6 /23	クレルヴォーの門の教会の祭壇	クレルヴォー院長エドモン	○
84	1549	6 /25	モヴェ・コンセイユの祭壇	クレルヴォー院長エドモン	
85	1609	10/ 9	聖ディオニシウス・聖ヒュアキントス・トレンティーノの聖ニコラウス	クレルヴォー院長ドニ・ラルジャンティエ	○

（注）○は聖ベルナールの聖遺物の存在。

いて考察する。

16・17世紀に追加された57の礼拝堂と祭壇の聖別に関する文書には，クレルヴォーの聖堂内または敷地内の祭壇に加え，グランギア，ケラリウム，ドムスといった外部の施設の礼拝堂の祭壇，さらに他の修道院の祭壇に関する情報が含まれている。これらの祭壇の聖別を行ったのは司教ではなくクレルヴォー院長である。1488年から1495年に院長ピエールが11の祭壇，1496年から1508年に院長ジャンが28の祭壇，1509年から1549年に院長エドモンが10の祭壇，最後に，1609年に院長ドニ・ラルジャンティエが１つの祭壇を聖別した（表２参照）。ほとんどの文書において教皇インノケンティウス８世の特別の委任と特権に基づいて院長により聖別がなされたと明記されている[41)]。

これらの聖別は必ずしも新規の祭壇の設置に際して行われたのではなく，祭壇の建て替えの際の再聖別としてなされた。例えば，クレルヴォーの門の礼拝堂の祭壇の文書に「これらの聖遺物は新しい祭壇が建てられる前はこの礼拝堂の古い祭壇にあった」と祭壇の建て替えの際に聖遺物が移され

たことが明確に書かれている[42]。また，いくつかの文書では祭壇の破壊行為の言及があり，「この祭壇の石は封印されていたが，大胆で不敬な手により壊されたり，動かされたりした後に奉献された」という文言が登場する[43]。

古い祭壇の封印を解いて聖遺物を新しい祭壇に移す作業がなされる際には，祭壇に納められた聖遺物の名前を記した文書が参照される。こうした文書の文字が時の経過による劣化で判読不能なためにどの聖人の聖遺物かが不明であることが記されることもある。また，その他の多くの聖人の名は「生命の書」に記されていると書かれ，その参照を求めていることもあり，聖遺物のリストは不完全なことが多い。

百年戦争の影響で修道院を取り巻く状況が悪化する15世紀から宝物目録がたびたび作成され，聖具室の記録作成の活動は盛んになった。1640年の目録では三十年戦争の際に聖遺物や宝物を隠したことが記されているが[44]，こうした脅威や混乱から保護することが記録作成の目的であった。1504年に完成した２番目の宝物目録も祭壇の聖別の動きを開始した院長ピエールの下で準備されたものである。この時期に聖別に関連した文書が集中的に作成されているのも，修道院の聖なる財産を再把握し，記録することで安全に保存しようとする動きの一環として捉えられるだろう。

既に述べたように写本には修道院の周辺の施設の祭壇の聖別に関する文書が多数あるが，シトー会では所領経営の中心であるグランギアに礼拝堂や祭壇を設置することは当初禁止されていた。グランギアは伝統的なベネディクト派の修道院に付属するプリウレとは異なり，祈祷や典礼ではなく労働の空間とみなされ，グランギアに居住して肉体労働を行う助修士には毎週日曜日や重要な祭日に修道院の聖堂でのミサに参加する義務があった。

しかし，実際には寄進された土地に付属する礼拝堂やシトー会に編入された修道院が所有していた礼拝堂などグランギアにも礼拝堂が存在する場合があり，総会はこうした礼拝堂の規制を試みた。1180年にグランギアで

新たな祭壇の設置が禁止され，既存の祭壇でもミサの執行が禁止された。次にラ・ビュシエール修道院の礼拝堂が1204年の総会で問題とされ，すべての修道院のグランギアの礼拝堂の破壊が命じられた。しかし，このような強硬な措置は翌年には緩和され，聖別された祭壇の存置を認めた上でミサを行うことのみが禁止された[45]。さらに1236年の総会では編入前からの礼拝堂でのミサが認められ，最終的には1255年に教皇アレクサンデル４世によりグランギアでのミサの執行が許可されている[46]。このように12世紀末から13世紀初頭に総会はグランギアの礼拝堂への規制を強化するものの最終的には祭壇の存在もミサの執行も容認するに至った。総会決議において小教区教会との競合を避ける配慮がなされているように，グランギアの礼拝堂は基本的に周辺の住民ではなく，助修士のための施設であったようである[47]。

このような総会の態度変更は，理念と現実の対立を強調する議論において，修道院と周辺のグランギアが緊密に連携するシトー会の経済の体制が弛緩し，伝統的なベネディクト派修道院と類似した所領構造に回帰していく傾向の証左とみなされることが多かった。例えば，フォシェはこうした動きをシトー会独自の経済の原則からの逸脱とみなし，否定的に評価した[48]。しかし，経済史の枠組みの先行研究では祭壇や聖遺物の意味については十分に考慮されなかった。それゆえ，本稿では聖なる空間の組織という観点からこの現象に注目したい。

クレルヴォーの周辺空間に注目すると，ウトル・オーブ（Outre-Aube），フラヴィル（Fraville），フォンタルス（Fontarce），シャンピニー（Champigny），ラ・ボルド（La Borde），モラン（Morins），ブランフェ（Blinfey），コルネ（Cornay），ファン（Feins），セルモワーズ（Sermoise）のグランギアの礼拝堂に関する文書が存在する。また，ぶどう栽培の経営の中心であるケラリウムについてもコロンベ（Colombé-le-sec）とモルヴァル（Morval）の祭壇が聖

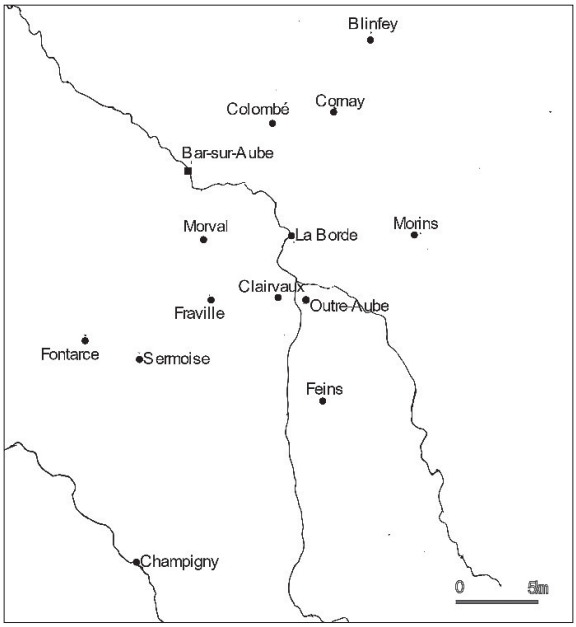


図２　クレルヴォーの周辺空間

別されている。さらに，近隣のバル・シュル・オーブ（Bar-sur-Aube）にあるドムスのル・プティ・クレルヴォーの礼拝堂と祭壇に関する情報が史料から得られる（図２参照）。確認しておくべきなのは，すべてのグランギアとケラリウムに礼拝堂と祭壇が設置されたわけではないことである。そして，史料から得られるのはこの時期に聖別された祭壇に関する情報であり，おそらくすべての祭壇を網羅しているわけでないことにも注意する必要がある。

グランギアのうちウトル・オーブ，フラヴィル，フォンタルス，シャンピニー，ラ・ボルド，ブランフェ，コルネは12世紀に創設された重要な経営の中心地であり，モラン，ファン，セルモワーズは13世紀に創設された副次的なグランギア群に属している。シトー会では助修士が毎日曜日に修

道院に来ることを想定し，グランギアを修道院から１日行程（約20～30㎞）以内の距離に設置する決議が1152年に定められたが[49]，この規則はどこでもほとんど守られなかった。クレルヴォーでも，例えば，ウトル・オーブは1.2㎞，フラヴィルは4.5㎞の位置にあるが，フェニュは69㎞，マルサルに至っては153kmも遠隔にある。ここで史料から礼拝堂や祭壇の存在が確認できるグランギアは，いずれも修道院から30㎞以内に立地している。移動の困難ゆえに遠隔のグランギアから礼拝堂が設置される事態が想定されるが，実際には修道院との距離の遠近とは関わりなく，13世紀にはグランギアに礼拝堂が設置され始めた。

こうした場所の祭壇に納められた聖遺物の数は，省略されてすべてが書かれないことも多いが，聖堂内の祭壇に比べて少なめである。聖書に関連した人物の聖遺物と殉教者の聖遺物がほとんどであるが，特徴的なのは11の祭壇について聖ベルナールの聖遺物が含まれていることである。ウトル・オーブ，フォンタルス，シャンピニー，ラ・ボルド，ファン，コルネ，ブランフェ，コロンベに聖ベルナールのククラが，モランには聖人の揺り籠が納められている。また，修道院の敷地内でも，フランドル伯の礼拝堂，門の礼拝堂，古い修道院，聖堂入口付近の祭壇に聖ベルナールのククラが配置されていた。

フィッツギボンは12世紀のシトー会の聖人崇敬は基本的に共同体の内部で行われたものであり，外部から巡礼を集めたり，聖遺物を拡散したりしない特徴があると指摘した。ヘンリー２世に指の骨が贈られたのを除いて聖ベルナールの遺骸は聖堂の墓に安置され，1170年代の移葬や列聖の際も巡礼は遮断され，接触型の聖遺物も拡散しなかったとされる[50]。基本的に共同体内部での崇敬であるという点は共通しているものの，13世紀以降に創建者の聖遺物が聖堂の外に拡散していくことに注目すべきである。この現象についてはこれまで十分に論じられてこなかったが，シトー会の聖遺

物崇敬や聖なる空間の組織のされ方を考える上で重要である。ベルナールの聖遺物を修道院とその周辺に分散し，分有することには，離れている兄弟の間で共同体の一員としての霊的な絆を強化する意味があるだろう。

ダブリン写本には他のシトー会修道院の祭壇の聖別に関する文書も収録されている。修道院の名を列挙すると，ロンゲ（Longuay），ウルスカン（Ourscamp），ラ・ピエテ・デュー・レ・ラムリュ（la Piété-Dieu-lès-Ramerupt），モントルイユ・レ・ダム（Montreuil-les-Dames），ラビエット（L'Abbiete），ロリーヴ（l'Olive），ジャルディネ（Jardinet），ヴィレール（Villers），モール（Mores），レニー（Reigny），ノワールラック（Noirlac），フォントネー（Fontenay），ヴァル・デ・ヴィーニュ（Val-des-Vigne），ノートルダム・デ・プレ（Notre-Dame des Prés）に関する文書である（図3参照）。このうちロンゲ，ウルスカン，ジャルディネ，ヴィレール，モール，レニー，ノワールラック，フォントネー，ヴァル・デ・ヴィーニュ，ノートルダム・デ・プ

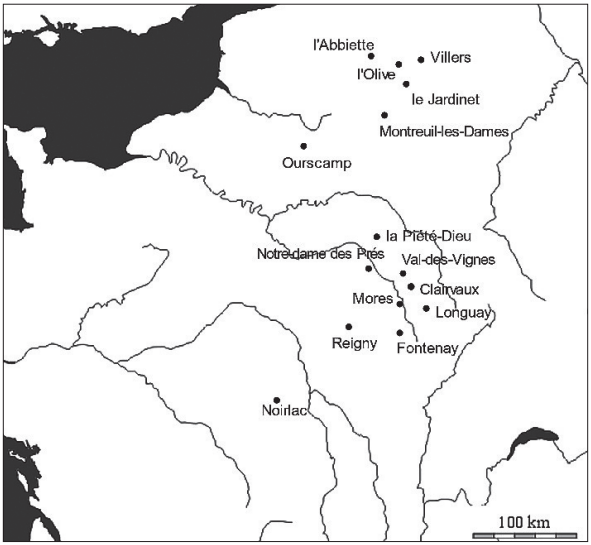


図3　祭壇を聖別された修道院

レはクレルヴォーの娘修道院と系列修道院である。また，モントルイユ・レ・ダム，ラビエット，ロリーヴ，ノートルダム・デ・プレといった女子修道院や15世紀に女子修道院から男子修道院に変わったばかりのラ・ピティエ，ジャルディネ，ヴァル・デ・ヴィーニュが含まれている点も特徴的である。クレルヴォーとの関係が不明な修道院もあるが，クレルヴォー院長は自身の系列修道院や系列外でも関係の深い女子修道院の祭壇を聖別してまわったのである。

注目すべきなのは，このうち12の祭壇にやはり聖ベルナールの聖遺物が存在していることである。聖人のククラの例が多いが，他に揺り籠やベッドカバーや履物などの接触型の聖遺物が祭壇に納められている。また，ウルスカン修道院の聖具室にはベルナールのククラだけでなく髪も存在した[51)]。クレルヴォー修道院から贈られた創建者の聖遺物には系列内のベルナール崇敬を促進し，系列修道院間の一体感を強化するような役割が期待されたであろう。また，系列の外にある場合には，クレルヴォーとの特別な関係や修道会の一員としての絆を象徴するような意味を持ったであろう。このようにシトー会の内部において断片化した聖遺物には組織やネットワークの統合を促すような役割が与えられていたと考えられる。

空間の組織化という観点からは，修道院とその周辺のグランギア，ケラリウム，ドムスのネットワークが「シトー空間」を構成しているが，後者が労働の場であるだけでなく礼拝の場としても機能するようになる点が重要である。急激に所領が拡大する中で外部にいる兄弟たちに安定的に司牧を提供する必要は高まった。こうして13世紀以降にクレルヴォー修道院の周辺に聖なる極が拡散することになったが，これは中心と周辺の統合の弱体化というよりもこの時代の両者の関係の調整を示すものとして捉えられるだろう。祭壇と聖遺物は両者を引き離すものではなく，つなげる働きをしたと考えられる。こうした動きは中世後期のシトー会の特徴である聖人

崇敬の多様な働きの一つの側面であり，クレルヴォーは創建者の聖遺物とその記憶を共有する共同体として再定義されていくのである。

おわりに

ここまで祭壇と聖遺物に注目してクレルヴォー修道院がどのように聖なる空間を形成したのかを検討してきた。クレルヴォー修道院は豊かな聖遺物のコレクションを保持し，それを聖堂の内外に入念に配置した。『祭壇書』からは聖堂内の祭壇の形成の過程が辿れた。第三聖堂の建設開始から短期間にアプスとトランセプトの多くの祭壇が建てられ，1157年から61年の短期間に多くの祭壇が聖別された。聖ベルナールが列聖され，移葬された1178年に聖堂改築が完了したが，その後も祭壇は追加され，領主や院長により付属礼拝堂が建設された。第三聖堂は聖ベルナールと聖マラキの墓を中心に構成され，その周囲に普遍的な聖人や地域的な聖人の聖遺物が配置され，キリスト教世界の歴史と地理におけるクレルヴォーの位置が示された。また，12世紀末以降は聖ベルナールと聖マラキの聖遺物が墓だけでなく周囲の祭壇にも配置されるようになった。二人の聖人は兄弟たちに起源の記憶を想起させ，共同体のアイデンティティを強化するような役割を与えられた。

ダブリン写本の追加部分からは，13世紀以降にグランギアやケラリウムやドムスといった周辺の施設にも祭壇を設置したこと，クレルヴォー院長が系列の修道院や女子修道院など他のシトー会修道院の祭壇を聖別してまわったこと，こうした祭壇の多くに聖ベルナールの聖遺物が納められていたことが明らかになった。このように中世後期には修道院領の全体に聖なる極が分散していく現象が認められるが，クリュニーのバン・サクレのように領域全体が一円的に聖化されることはなかった。クレルヴォーの獲得したインムニタスや免属は禁域やグランギアの内部を平和で静謐な空間と

するものであり，こうした多くの聖なる極からなるネットワークが形成された。こうした動きは中心と周辺の連携の弛緩の象徴ではなく，司牧的な配慮や聖人の崇敬を通じて両者の関係を調整する試みとして捉えられる[52)]。また，祭壇の聖遺物に系列の修道院やその他の修道院との関係を補強するような役割も与えられていた。これは中世後期のシトー会において聖人や聖遺物の崇敬が果たした様々な機能の一つとして注目に値する。以上のように祭壇の聖遺物には過去と現在を繋ぎ，地理的な距離を埋めて共同体の形成と維持を支えるような働きが期待された。シトー会の聖なる空間と典礼の実践についてより具体的に検討することは今後に残された課題である。

注

1） Lauwers, M., “De l’incastellamento à l’inecclesiamento. Monachisme et logiques spatiales du féodalisme,” D. Iogna-Prat, M. Lauwers, F. Mazel, I. Rosé, ed., *Cluny, les moines et la société au premier âge féodal*, Rennes, 2013, pp. 315–338.

2） *L’espace cistercien*, ed., L. Pressouyre, Paris, 1994.

3） 近年の概説では聖人崇敬に関する記述が増えている。Burton, J., Kerr, J., *The Cistercians in the Middle Ages*, Woodbrige, 2011, pp. 126–140. Jamroziak, E., “The Cult of Saints in Medieval Cistercian English Houses: A Forgotten Phenomenon?,” *Nottingham Medieval Studies*, 65, 2021, pp. 81–97. 12世紀のシトー派の巡礼への態度については，Fitzgibbon, G., “For fear of the multitudes: disruptive pilgrims and appropriate audiences for Cistercian relics in the twelfth century,” PhD thesis, University of Birmingham, 2020.

4） 北舘佳史「13世紀末のシトー会レ・シャトリエ修道院におけるジェロー・ド・サルの記憶」（『人文研紀要』92号，2019年）343–368頁；同「聖トマス・ベケットの約束と巡礼地の誕生―ポンティニーの聖エドマンド崇敬をめぐる論争―」（『人文研紀要』98号，2021年）185–208頁。

5） Mouraire, E., “Les autels et les reliques de l’abbatiale de Cîteaux,” *Bulletin du centre d’études médiévales d’Auxerre* | BUCEMA［En ligne］, Hors-série n° 4 | 2011. URL : http://journals.openedition.org/cem/11799.

6） Colker, M. L., “The Liber Altarium and Liber Sepulchrorum of Clairvaux（in

a Newly Discovered Manuscript)," *Sacris Erudiri*, 41, 2002, pp. 391–465（以下，LALS と略す）. 1517年のシチリア王妃の訪問記は，Michelant, H., "Un grand monastère aux XVIe siècle," *Annales archéologiques*, 3, 1845, pp. 223–239. サン・モール会士の訪問記は，Martène, E., Durand, U., *Voyage littéraire de deux religieux bénédictins de la congrégation de Saint-Maur*, Paris, 1717, pp. 98–105.

7） Kinder, T. N., "Les églises médiévales de Clairvaux - Probalités et fiction," *Histoire de Clairvaux*, Bar-sur-Aube, 1991, pp. 205–230.

8） Gajewski, A., "Burial, cult, and construction at the abbey church of Clairvaux (Clairvaux III)," *Cîteaux: commentarii cistercienses*, 56, 2005, pp. 47–84; Santamaría, E. C., "Autour de Saint Bernard. Chronologie et implications spatiales du culte des reliques à Clairvaux," *Cîteaux, Commentarii cistercienses*, 64, 2013, pp. 187–197.

9） Lalore, Ch., *Le trésor de Clairvaux du XIIe au XVIIIe siècle*, Troyes, 1875. 1405–1410年の目録史料は，d'Arbois de Jubainville, H., "Trésor de Clairvaux," *Revue des Sociétés savantes de la France et de l'étranger*, 5, 1873, pp. 490–508. 1640年の目録史料は，Vernier, J. -J., "Inventaire du trésor et de la sacristie de l'abbaye de Clairvaux de 1640," *Bibliothèque de l'École des Chartes*, 63, 1902, pp. 599–677.

10） Lester, A., "Le trésor de Clairvaux," A. Baudin, N. Dohrmann, L. Veyssiere, ed., *Clairvaux. L'aventure cistercienne*, Paris, 2015, pp. 213–223; Baudin, A., "Les reliques de l'abbaye de Clairvaux, de la Révolution à nos jours. À propos d' un document inédit conservé à l'abbaye de Cîteaux," *Mémoires de la Société académique de l'Aube*, 142, 2018, pp. 133–148.

11） Lalore, *op. cit.*, p. 150.

12） Henriquez, C., *Fasciculus Sanctorum Ordinis Cisterciensis*, t. 2, Bruxelles, 1623, pp. 407–417; Migne, J. -P., *Patrologia Latina*, t. 185, Paris, 1862, col. 1549–1562; Lalore, *op. cit.*, pp. 183–215.

13） Trinity College Library, Dublin, MS 10708. 写本の発見の経緯については，Colker, M. L., "Discovery of a manuscript of the *Liber altarium* and *Liber sepulchrorum* of Clairvaux," *Scriptorium*, 51, 1997, pp. 68–76.

14） *Ibid.*, pp. 69–70.

15） *Ibid.*, p. 75.

16） *LALS*, p. 399: "Que sequntur de consecratione altarium in ecclesia Clarevallis existantium extracta sunt de quodam registro sacristie antiqua littera scripto hoc modo."

17） Cordez, P., “Gestion et médiation des collections de reliques au Moyen Age. Le témoignage des authentiques et des inventaires,” J. -L. Deuffic, ed., *Reliques et sainteté dans l’espace médiéval*, Saint-Denis 2006, pp. 39–40.

18） Baudin, *op. cit.*, p. 135.

19） Lester, *op. cit.*, pp. 214–218.

20） *Ibid.*, pp. 218–220.

21） *Ibid.*, pp. 220–221.

22） MS 10708, p. 399: “Anno ab incartione domini millesimo c°lvii°, a transitu uero reuerentissimi patris nostri domni Bernard anni iiii°, ab inchoatione autem ecclesie anno quinto, consecrata sunt octo altaria in orientali parte eiusdem ecclesie circa maius altare...”

23） 本文中では祭壇は捧げられた聖人たちのうちの筆頭の聖人名で記すことにする。また，図の祭壇の同定はガジェウスキの前掲論文に倣った。近世史料をもとに11を大天使ミカエルの祭壇，14を聖アンナの祭壇と同定しているが，ダブリン写本では南側に聖アグネスの祭壇と聖アガタの祭壇が所在する。

24） Santamaría, *op. cit.*, pp. 187–197.

25） Veyssière, L., “Le personnel de l’abbaye de Clairvaux,” *Cîteaux, Commentarii cisterciensis*, 51, 2000, pp. 17–89.

26） ここに挙げた人物の多くが『埋葬書』やクレルヴォーの殉教者暦に登場する。この点については稿を改めて論じたい。

27） Gajewski, *op. cit.*, pp. 71–73.

28） *LALS*, pp. 410–411.

29） *LALS*, pp. 414–415.

30） *LALS*, p. 415.

31） *LALS*, p. 422.

32） *LALS*, p. 415.

33） Gajewski, *op. cit.*, p. 75.

34） *LALS*, pp. 416–418.

35） *LALS*, “Et relique que allate sunt de Hybernia quarum brevia legi non poterant ob barbariem scripture.”

36） Braun, J., *Der christliche Altar in seiner geschichtlichen Entwicklung*, vol.1, München, 1924, pp. 620–621.

37） Drunecker, L., “Consécrations d’autels et dépôts de reliques. L’exemple de Saint-Étienne de Dijon du XIe au début du XIIIe siècle,” D. Méhu, ed., *Mises en scène et mémoires de la consécration de l’église dans l’Occident médiéval*,

Turnhout, 2008, p. 208.

38） Fitzgibbon, *op.cit.*, pp. 23–26.

39） *Ibid.*, pp. 45–46.

40） Bernard de Clairvaux, Lettre 374, *Eloge de la nouvelle chevalerie, Vie de Saint Malachie, Epitaphe, Hymne, Lettres*, Paris, 1990, p. 335.

41） ダブリン写本には教皇インノケンティウス 8 世の勅書が収録されている。MS 10708, pp. 56–60.

42） MS 10708, p. 79.

43） 例えば，MS 10708, p. 62: “hoc altare cuius lapis qui quondam sigillum continebat ausu temerario et manibus prophanis effractus seu motus fuerat consecratum fuit...”

44） Vernier, *op.cit.*, p. 601.

45） グランギアの礼拝堂の規制については，Higounet, Ch., “Essai sur les granges cisterciennes,” Ch. Higounet, ed., *L'économie cistercienne. Géographie. Mutations, du Moyéen Âge aux temps modernes*, Auch, 1983, pp. 157–180. Canivez, J. -M., *Statuta capitulorum generalium ordinis cisterciensis ab anno 1116 ad annum 1786,* Louvain, 1933–41, vol. 1, 1180: 6 ; 1204: 11, 1205: 7.

46） Canivez, *Statuta,* vol. 2, 1228: 1 ; Henriquez, C., *Regula constitutiones et privilegia ordinis cisterciensis,* Anvers, 1630, p. 67.

47） 小教区教会から遠い場合に雇用労働者に秘跡を与えることが許可されることがあった。William, D.H., “Cistercian Grange Chapels,” T. N. Kinder, ed., *Perspectives for an Architecture of Solitude: Essays on Cistercians, Art and Architecture in Honour of Peter Fergusson*, Turnhout, 2004, pp. 214–215.

48） Fossier, R., “Les granges de Clairvaux et la règle cistercienne,” *Citeaux in de Nederlanden*, 6, 1955, pp. 259–266. イグネもまた前掲論文で「純粋な」12世紀に対して13世紀の「堕落」の例として言及している。

49） Canivez, *Statuta*, vol. 1, 1152: 1.

50） Fitzgibbon, *op. cit.*, pp. 84–85.

51） MS 10708, p. 68.

52） ロウェルスは12世紀までの修道院空間の展開を内と外の関係の観点から描き，シトー会による両者の連関の再定義について論じているが，13世紀以降も再定義がなされ続けたのである。Lauwers, M., “Interiora et exteriora, ou la construction monastique d'un espace social en Occident entre le Ve et le XIIe siècle,” *La società monastica nei secoli VI–XII*, 2016, pp. 59–88.